



「ごめんね…うちじゃかってあげられないの」

薄暗い神社の境内の下に、そっと私を置いた。

小雨が振り出した夕方、君は泣きながら走り去っていった。私は後ろ姿を見ながら少しさびしさを感じた。

「君と私の夏」

真夏の学校はだるい。冷房設備がない教室はまるで乾ききったダムのようなのだ。その上つまらない授業だというのに、この暑さでおちおち寝てもいられない。

授業も終わり、午後のHR（ホーム・ルーム）が始まった。

「今日のテーマを決めたいと思います」

まったく毎回毎回同じような課題ばかりが出て、正直つまらない。どうせ今日もろくでもない課題になるのだろう。

「それでは自分の家族についてにしましょうか」

なんだなんだ？今日はまた面倒臭いになったな…先生もネタが付きたかな？

「自分の家族、両親、兄弟、祖父母。なんでもいいので家族について調べてきてください。次の週に発表してもらいます」
げっ！

みんな暑さで反論もできない様子だった。

「まったくまた余計な課題だしてさ」

「本当ー」

下校、友達2人と並んで歩きながらHRの課題について愚痴をこぼしあう。

「そろそろネタもつきてきたか」

「ねー！しかも最後に発表なんてありえない？」

「ありえない！」

私、白井 青葉（しろいあおば）は一際大きい声で叫んだ。

「家族なんてありきたりだし、調べるも何ももうとっくにわかってんじゃん！」

「そうそう！」

3人であーだこーだ話しながら、十字路で別れた。

「またねー」

「青葉ー、これおじいちゃんに持ってってー！」

「えー」

「早くいきなさい！もう夜だから涼しいでしょ」

「…はーい」

夕飯のおかずを家の向かいのおじいちゃん家に持っていく。

「じーちゃん！」

玄関に入って叫んだ。その時、聞きなれない声が聞こえた。

「？」

私は声の主を探す。塀の上や木の影…

「あ、いた！」

そこにいたのは、真っ黒でしなやかな体。緑がかかった黄色い目。

「ニャー」

猫だ。黒猫だ。

黒い体が闇に紛れて、目がギラつく。

「おまえどこからきたんだ？」

「おー飯か」

じいちゃんが奥の扉から顔を出した。

「あ、じいちゃんこの猫前からいるの？」

猫の方に視線を戻した。

「あれ？」

「猫？」

そこには何もいなかった。

「今黒い猫がね…」

「野良猫じゃないか？」

「そっか…」

その時は特に気にもせず、それで終わった。

こういうの何て言うんだらう？

「今黒い猫がね…」

「野良猫じゃないか？」

「そっか…」

たまたま通りかかった建物で、あの時の君を見つけた。建物の影から二人を見つめる。

しばらく見ていると、君は向かいの建物に消えてった。そこが君のねぐらなんだね。

—…

また会いに来るね。

今日は休みだ。こういう暑い日は海だ海！というわけで、友達誘って自転車で海に出かけていった。

海に近づくにつれ、だんだん怪しい天気になっていく。心配になって、友達と相談する。

「大丈夫、大丈夫！」

大丈夫じゃなかった。海についた途端、大粒の雨が降り出した。強風にあおられ、波も高くなっていったため、やはり中止にしてそれぞれ猛ダッシュで帰った。

凄まじい風と横殴りの雨で自転車がこげず、近くの神社に避難した。

昼だというのに夕方のように暗く、風にあおられる木々がぞっとするような影を落とす。

風の音がさらに恐怖を引き立たせる。

「通り雨じゃないのかな」

いつまでたっても雨は止まず、それどころか雨がだんだん硬くなっていく。

「痛っ！」

バラバラ…

雨は拳くらいの雹（ひょう）に変わっていた。急いで、境内の下に避難した。

境内の下は土臭くて虫の死骸だらけで、さらに不安が募る。

ニャー

「！？」

思わず飛び上がった。天井に頭をぶつける。頭をさすりながら声のした方を見ると、じいちゃん家で見た黒猫がいた。

「おまえかー…びっくりさせないでよ」

黒猫は近くまで寄ってきて、人懐こそうに脚に頭をこすりつける。

私はなんだか少しだけ安心した。

黒猫は黄色い目で私を見つめる。

「ん？何も持ってないぞ？」

黒猫の目を覗き込んだ時、何か懐かしいものを感じた。

—境内、黒猫、雨、夏…

「あ…おまえもしかしてあの時の黒猫…」

私が小1の時、神社で黒い子猫を拾って家に連れ帰った。しかし母に拒否され、泣く泣く境内の下に置いてきたのだった。

「ンニャー」

すっかり大きくなった…むしろ年を取った猫が私に何か言ってる。

「また会うなんて…運命ってやつかな？あの時はごめんね」

頭を撫でると、ゴロゴロとのどを鳴らす。

雨が止むまで、私と黒猫は語り合うことにした。といっても、私が一方的にしゃべってたんだけど…

しかし一向に止む気配がなく、夕方になってしまった。

「やばい…家に帰らなきゃ」

夜の帳がおり始め、境内の下から這い出る。雹は雨に戻っていた。自転車はもうこぐどころじゃないため、神社に置いていくことにした。

「それじゃあ、また会おうね」

黒猫に手を振り、ダッシュで家に向かった。

「ンニャー」

嵐を避けた狭い建物の下で、君と今までのことを語り合った。私の話を君は笑いながら頭を撫でてくれた。例え言葉は通じていなくても、私は幸せだった。

ところがだんだん外が暗くなってきた時、君は何かを決意したように、雨の降る外に出た。

—まだ危ないよ。嵐が通り過ぎるのをまたなきゃ…

君は私に笑顔で手を振り、猛然と走り去っていった。私は胸騒ぎがした。

君の姿はあっという間に暗い道に消えた。

—追いかけてよう。今ならまだ間に合うかもしれない

私は雨の中へ飛び出した。

「ハア…ハア…」

走っても走っても前に進まない。その上暗くて、今自分がどこを走っているかもわからない。

全身びしょぬれになりながら、家を探す。

ふと目に飛び込んできた知らない看板。周りを見回すと、知らない家ばかりが並んでいた。

「ここどこ？」

来た道を振り返っても、雨の水しぶきでよくわからない。急に怖くなって無我夢中になって家を探す。

—ない、ない、ない、ない

見えてくるのは知らない家ばかり。

—ないないないないないないないないない…！

不安と恐怖で押しつぶされそうになって、泣きそうになる。

後悔の念が強くなる。こんなことになるなら海にいかなければよかった。家で大人しくしていればよかった。雹になる前に家に帰ってればよかった。黒猫と話会ってるんじゃないか？黒猫に会わなければ—

私はつまずいて転んだ。うめきながら、四つんばいになる。涙が止め処なく溢れた。

—そうだ。あの時黒猫に会わなければ、こんなことにならなかったんじゃないか？私があの時拾いさえしなければ…

ニャー

猫の声にハッとしたり。見ると壁際にびしょぬれになったみすぼらしい黒猫がそこに立っていた。風にあおられながら、そこに必死に立っていた。

「おまえ…」

私を追いかけてきたに違いない。そんなおまえを私は…

黒猫はまるで、

「こっち」

だと言わんばかりに後ろを向いた。

黄色い大きな目で私を見る。

私は立ち上がった。

そして黒猫は先頭をきって走り出した。私は黒猫を見失わないよう必死で走り出した。

辺りはすっかり夜になり、電灯も付いているのか付いていないのかわからないくらい薄暗い。

しかし今はこの黒猫だけが頼りだ。黒猫が闇に紛れる度に不安になる。もしかしたら、このまま闇に溶けてしまうのではないかと。

数十分後、ようやく見覚えのある通りを走っていることに気が付いた。ここは家に続く近所に違いない。

そして自分の家が見えてきた。

「あった！」

私は嬉しくて嬉しくてたまらなかった。

—ああ…家ってこんなに安心できる所だったんだ。すべてはこの黒猫のおかげだ

そうしみじみ思った時だった。雨と風の音で聞こえなかったいきなり横から聞こえた音に、びっくりする余裕もなく—

—

黒猫が消えた。

ついに闇に溶けてしまったのだろうか…

そう思った瞬間、大音量が頭を貫いた。思わず、悲鳴を上げその場にうずくまった。

私たちの目の前の十字路に、いきなり飛び出してきた大きな黒い闇がぬっと現れた。

黒い車だった。車が止まって、中から誰か出てきた。私に近づいてきて、そっと話しかける。

「大丈夫？君、ひょっとして白井青葉さん？」

「へっ？」

両耳を抑えていた手を離して、運転手を見る。

青い制服に金字の模様、腰には警棒と銃…警察だった。

「ごめんね。暗くて見えなかったんだ…」

そう言い訳している間、私はわけがわからず黒猫を探した。闇に溶けてしまった黒猫。どこへ行ってしまったの？

「青葉さんがご友人と海に出かけてしまってから、台風が来てね。夜になってもなかなか帰ってこない君を心配した家族の方から捜索願が出されて、今探していたところだったんだよ。ご友人はとっくに帰っているのに、青葉さんだけ帰ってこないと…」

なるほど、それでか。それで、もうスピードで家の周りを探していたというわけか！この察は私を殺す気か？

怒り心頭で、奴の話を聞いた。しかし警察も動いていたということに、恥ずかしさと安心で変な感じがして余計に腹立たしかった。

「それはありがとうございます。でも今私の前に黒猫がいたでしょ。黒猫にもあやまってくださいよ！」

奴は変な顔をした。

「黒猫？いませんでしたよ」

「！まさか轢いたんじゃ…！！」

慌てて、車の下を覗き込んだ。暗くてわからない。

「車バックしてくださいよ！」

バックさせたあと、もう一度確認する。が、そこには何もいなかった。辺りをきよろきよろと探したが、やはり何もいなかった。

。

他の人間が来たから逃げてしまったのだろうか。

「とにかく今は家に急ぎましょう」

確認させてくれるはずもなく、私は家に連れて行かれた。

後ろを振り返っても、ただただ闇があるだけだった。

一連の騒動と台風が過ぎたあと、もう一度あの十字路を見に行った。そこには何もなかった。じいちゃん家にも行った。神社に自転車を取りに行った。しかしあの黒猫はどこにもいなかった。

「どこへ行ったんだ？」

あの時言えなかったことが、なんだか暗い気持ちにさせた。

「さあ、HRを始めます。では一人ずつ当てていくので、読んでくださいね」

私は書いた原稿用紙を見つめた。

「じゃあ青葉さんからいきましょうか」

私は立ち上がって、原稿用紙を読み上げる。

「あの時の君へ

君に会えた私は幸せ者です。あの晩君に会えて嬉しかったはずなのに、少しでも後悔してしまいました。ごめんなさい。でもそんな私をあの時助けてくれて、本当に

ありがとう」

ニャー

どこかで猫が鳴く声が聞こえた。

おわり